

2024海外経済産業視察 ポルトガル・スペイン

〈テーマ〉

地球環境保全への取組

～再生可能エネルギーの利用促進とスマートコミュニティ事業の推進～

2024年10月12日(土)～20日(日)



埼玉経済同友会
国際委員会

CONTENTS

2 団長所感 活力のある地域の作り方と街の魅力 国際委員長 田中 徳兵衛

3 行程表

5 海外経済産業セミナー

〈テーマ〉スペイン・ポルトガルの経済概況

〈講師〉ジェトロ調査部 欧州課 リサーチ・マネージャー 江里口 理子 氏

ポルトガル

8 Quinta do Vallado 訪問 バリヤードワイナリー見学

9 ポルト市庁舎訪問 ポルト市のスマートシティ構想

11 TOPICS 1 ポルト市内観光

スペイン

13 在スペイン日本国大使館訪問 中前隆博特命全権大使と懇談

16 環境・技術研究センター(Ciemat)訪問 再生可能エネルギーの研究開発

18 TOPICS 2 マドリード市内観光

20 A&B イノベティブ・ソリューションズ訪問 同社の経営モデル

23 サンセバスチャン市庁舎訪問 「美食」をはじめとする地域ブランディング

25 TOPICS 3 ビルバオ・サンセバスチャン市内観光

26 参加者名簿

【表紙写真】

〈左上〉 バリヤードワイナリー見学

〈中上〉 ポルト市副市長のフィリップ・アラウージョ氏と田中委員長

〈右上〉 中前隆博特命全権大使のレクチャー

〈左下〉 環境・技術研究センター(Ciemat)での会議風景

〈右下〉 レアル・ソシエダ・サッカースタジアムグラウンドにて記念撮影

団長所感

「活力のある地域の作り方と街の魅力」

国際委員長 田中 徳兵衛



今回は「再生可能エネルギーとスマートコミュニティ事業の推進」をテーマにポルトガルとスペインに視察へ行って参りました。10月12日から10月20日の9日間の視察でしたが、毎日が見どころ満載で充実した内容でした。今回のテーマは上記に挙げておりますが、ポルト市、マドリード市、ビルバオ市、サンセバスチャン市それぞれ切り口の異なった視察でしたが、全体を通した感想を述べたいと思います。

まずは、お忙しい中日程を調整してご参加いただいた戸所、吉野代表幹事をはじめとする会員の皆様へ感謝申し上げます。日常では接する事の出来ない状況に触れ体感する事、それは風土や歴史や文化を踏まえて理解をする事です。ですので、視察全体が有意義な内容になると考えております。どちらの街づくりを聞いても、CO₂の排出を半減する目標を掲げられ、具体的に街づくりのスケジュールに載せている事が印象的でした。日本ではCO₂の削減はそれほど街づくりとして生活の中で意識は高くないと思いますが、スペインでは温室効果ガスの削減を2030年までに1990年比で32%の削減を目指しており、ポルトガルでは、2005年比で55%の削減に向け活動しています。日本では市民感覚としてそれほどまでに温室効果ガスについて関心があるとは思いません。いかがでしょうか？近年の日本においては、今までにないほどの大雨といった自然災害が日本各地で起きています。その原因は我々の生活の仕方にあると実感し行動していきたいと思えます。



一方、街の魅力については、「美食の街」として有名なバスク地方を訪れましたが、元々男性が街中の調理場に集まり料理を作る習慣があり街づくりの取り組みの中で偶然では無く計画的につくられました。食材の豊富さや穏やかな気候、美しい景色だけではなく、映画祭を開催し必要なコンベンションセンターを整備するなど街が一体となって取り組みをされている魅力的な街でした。我が街でも美しい景観や豊かな歴史だけではなく、美味しい料理も大切であり、ミシュランの星は無理でも魅力のある料理店を育てることも音楽や美術など芸術と同様に必要だと思えます。

最後に、お忙しい日程の中、大使公館でもてなしていただいた在スペイン特命全権大使中前隆博様をはじめとする大使館員の皆様へ感謝申し上げ、その後スペイン東部を襲った大水の被害に遭われた方へお見舞い申し上げ、報告とさせていただきます。

埼玉経済同友会「2024 海外経済産業視察」 行程表

日程：2024年10月12日(土)～ 2024年10月20日(日) 9日間

日数	月 日	都 市 名	現地 時間	交通機関	概要
1	10月12日 (土)	羽田発 フランクフルト着 フランクフルト発 ポルト着	09:40 17:30 20:55 22:45	NH-223 LH-1180 専用バス	全日空にて、フランクフルトへ (時差：-7時間) 【所要時間：14時間50分】 乗り継ぎ、ポルトへ (時差：-8時間) 【所要時間：2時間50分】 (ポルト泊)
2	10月13日 (日)	ポルト ↓ ドウロ地方 ↓ ポルト	09:30 11:30 17:30 19:00	専用バス	専用バスにてドウロ地方へ ドウロ地方訪問 バリエードワイナリー見学 ホテル着 専用バスにてレストランへ (ポルト泊)
3	10月14日 (月)	ポルト	09:00 13:00 15:00 16:15 16:30 18:45	専用バス 徒歩 徒歩 徒歩	午前、ポルト市内見学 (ポルト大聖堂、ポルサ宮殿等) ボリャオン市場へ移動 市場内レストランにて昼食 ポルト市庁舎(講義) サン・ベント駅へ徒歩移動、駅構内のタイ ル鑑賞後、ホテルへ徒歩移動 徒歩にてレストランへ (ポルト泊)
4	10月15日 (火)	ポルト発 マドリード着	05:30 08:15 10:35 13:30 15:00 16:00 17:30 18:00 19:30 22:15	専用バス IB-3091 専用バス 専用バス	専用バスにて空港へ 空路、マドリードへ 在スペイン日本国大使館大使公邸(懇談) 環境・技術研究センターCiemat(講義) ホテル到着後、チェックイン 専用バスにてレストランへ フラメンコ鑑賞(希望者のみ) (マドリード泊)

日数	月 日	都 市 名	現地 時間	交通機関	概要
5	10月16日 (水)	マドリード マドリード発 ビルバオ着	09:00 15:50 16:55 18:10 19:00	専用バス IB-438 専用バス 徒歩	マドリード市内見学 (オリエンテ広場、プラド美術館等) 空路、ビルバオへ ホテル着 徒歩にてレストランへ (ビルバオ泊)
6	10月17日 (木)	ビルバオ ↓ ビトリア ↓ ビルバオ	09:00 10:00 12:00 13:00 18:30 19:30	専用バス	専用バスにて移動 A&B イノベーティブ・ソリューションズ (講義・視察) ビルバオへ移動 午後、ビルバオ市内見学 (グッゲンハイム美術館等) ホテル到着 徒歩にてレストランへ (ビルバオ泊)
7	10月18日 (金)	ビルバオ ↓ サンセバスチャン ↓ ビルバオ	09:00 10:30 11:45 16:00 17:00 18:00 20:00	専用バス	専用バスにて、サンセバスチャンへ サンセバスチャン市庁舎(講義) サンセバスチャン市内見学 レアル・ソシエダ・サッカースタジアムツアー ホテル到着 徒歩にてレストランへ (ビルバオ泊)
8	10月19日 (土)	ホテル発 ビルバオ発 フランクフルト着 フランクフルト発	11:00 14:05 16:15 20:45	専用バス LH-1143 NH-224	出発まで、自由行動 専用バスにて、空港へ 空路、フランクフルトへ 【所要時間:2時間5分】 乗り継ぎ、帰国の途へ 【所要時間:13時間】 (機内泊)
9	10月20日 (日)	羽田着	16:45		解散

スペイン・ポルトガルの経済概況を学ぶ

9月12日(木)、国際委員会海外経済産業セミナー(委員長:田中徳兵衛氏)が、「スペイン・ポルトガルの経済概況」をテーマに会員と関係者を合わせ37名の参加によりリアル&オンラインにて開催された。

冒頭、田中委員長は「今回の海外視察で訪れるポルトガルとスペインは、日本とは500年近い歴史を有する大変関係の深い国である。今回の視察のテーマは『地球環境保全への取り組み～再生可能エネルギーの利用促進とスマートコミュニティ事業の推進』に設定したが、驚いたのはポルトガル・スペインの電力需要に占める再生可能エネルギーの割合がそれぞれ82%、46%と非常に高いこと。因みに日本は20.3%であり、如何に両国が環境に優しい電力の調達をしているということがわかる。今後の日本にとっても勉強になるところではないかなと思う。是非本日の講話及び海外視察を通じて今後の企業経営にお役立ちいただければ幸いである」と挨拶された。



当日はジェットロ調査部欧州課リサーチ・マネージャーの江里口理子氏から「スペイン・ポルトガルの経済概況」について講話をいただいた。

「スペイン・ポルトガルの経済概況」

〈講師〉日本貿易振興機構(ジェトロ)調査部欧州課リサーチ・マネージャー 江里口 理子 氏



■スペイン・ポルトガル基礎データ

【スペイン】

スペインの面積は日本の約1.3倍でEUではフランスに次いで大きい。また経済規模としてはドイツ・イギリス・フランス・イタリアに次ぐ欧州第5位で人口は4,869万人。中南米との繋がりに強みがある。

鉄道網であるがスペインではマドリードを中心に放射状に路線が伸びている。因みにバルセロナとパリはすでに高速鉄道で繋がっており3,200kmの長さは中国に次いで2番目に長い高速鉄道となっている。進出日系企業数ではスペインはドイツ・イギリス・フランス・オランダに次いで第5位の404社。

EUの実質GDP成長率は0.4%だがスペインは個人消費の回復や観光業が大きく伸びたことを要因として2.5%と高い伸びを示している。また欧州各国では2021年以降、エネルギー価格や食料品のコスト上昇により消費者物価指数が6.4%と上昇したが、特に水道・光熱費の物価上昇率が抑えられたことから3.4%と欧州平均よりも低い水準となった。次に失業率だが、過去10年間で半減してはいるが2023年の失業率は12.2%とEUの中で最も高く、特に若年層の失業率が高い。これは観光・サービス業の比重が大きく、慢性的に生産性が低いことや、多くの雇用契約が臨時雇用であることが要因。

政治についてであるが、長年中道左派の社会労働党と中道右派の民衆党の二大政党が続いているが、

現在は社会労働党のペドロ・サンチェス氏が首相を務めている。第一党は民衆党でありねじれの状態となっているが、サンチェス氏が下院で7議席を持つカタルーニャ州の独立主義政党に対し恩赦法案の受入の見返りに信任を得て続投している状況。

【ポルトガル】

ポルトガルの面積は日本の約4分の1で北海道より一回り大きい規模感。人口は1,064万人とスペインの約5分の1であるが小国ながら外国語が堪能な人材が豊富で、旧植民地のアンゴラ・モザンビークを通じたアフリカとの関係や、ブラジルを通じた中南米との関係に強みがある。

鉄道網はかつてリスボンとマドリードを結ぶ計画が欧州債務危機により2012年に白紙撤回。2030年までにリスボンとポルトを結ぶ約300kmの高速鉄道計画が発表されている。進出日系企業は118社と欧州主要国では最下位のレベル。実質GDP成長率は2.3%で消費者物価指数が5.3%。失業率は6.5%とEUの中で8番目に高い水準。観光・サービス業の比重が大きい事と、一説によれば国民の上昇志向が高くより良い仕事を求めて辞めるケースが多いとのこと。政治についてであるが2024年3月に総選挙が実施され、8年ぶりに社会民主党を筆頭とする右派連合に政権交代した。極右のシェーガ党が最も躍進したがシェーガ党は連立の枠組みに入らなかったため政権は不安定な状況。

■貿易動向

【スペイン】

スペインの貿易動向は、2022年はウクライナ侵攻などエネルギー価格の高騰もあり輸出入とも過去最高を記録したが2023年はエネルギー価格が落ち着いたことからやや減少した。内訳は商用車の輸出が前年比37.3%増と好調であったが、豚肉が生産減による価格高騰で競争力低下、世界生産の6割を占めるオリーブ油も干ばつにより生産量が6割減、価格が8割値下げとなっている状況。一方輸入は電気自動車の生産増を背景にリチウムイオン電池やワイヤーハーネスなどの資本財が伸びたが、鉱物・エネルギーはエネルギー価格下落により3割程度減少している。主な貿易相手国は輸出ではEU圏内が62.7%を占めフランス・ドイツ・イタリアが上位を占めている。因みに日本向けは0.7%と低い水準。輸入ではEU圏内は50%、アジア大洋州からの輸入が17.7%と相応のウエイトを占めるがこれは主に中国からの乗用車の輸入が大きいことが要因。因みに日本への輸出は豚肉・乗用車・オリーブ油・革製品・ワインが多く、輸入では乗用車や機械部品が高いウエイトを占めている。

【ポルトガル】

ポルトガルの貿易動向は、スペインと比較すると輸出入の規模は4分の1～5分の1。輸出入とも輸送用機械(自動車・自動車部品)、電気機器、機械類等が大きなウエイトを占めるが家具や衣類といった項目が入っているのも特徴的。貿易相手国は輸出入の約7割がEU域内貿易で特にスペインに占める割合が高い。EU域外市場強化のためポルトガル語を公用語とする9か国のポルトガル圏諸国共同体(CPLP)との関係強化を図っているがなかなか進展していないのが実情。因みに日本向けは輸出入とも0.5%と低い水準。日本向け輸出では自動車等の輸送機器、食品ではトマト調整品やワイン、冷凍魚など。

■投資事例

【スペイン】

日本からスペインへの投資では、AGCによる合成医薬品の生産拠点の設備増設や花王によるスペイン子会社工場の設備投資、電通によるコンサルティング会社の株式取得など多くの日本企業による投資が行われている。

【ポルトガル】

日本からポルトガルへの投資でプレゼンスが大きい例が丸紅。2013 年以降、電力、上下水道、ガス配
送事業に参入し、17 年には総合商社で唯一リスボン出張所を設置している。またトマトの加工産業が盛
んであり、カゴメが研究開発センターとトマト加工工場を所有している。2022 年には NEC と共同でスマー
ト農業をすすめるテクノロジー開発企業を設立している。

■食と観光業

【スペイン】

スペインもポルトガルも観光大国であるが、スペインでは 2023 年に過去最高の 8,510 万人(因みに日
本は 2,500 万人)もの外国人観光客が訪れた。内訳であるがイギリス、フランス、ドイツ、オランダ、イタリア
の上位 5 か国で約 6 割を占める。観光業は GDP の 11.6%を占め、観光部門の雇用者は全雇用者の
9.3%を占めている。一方、オーバーツーリズムが社会問題化しており、住宅供給のひっ迫や住居費高騰
が課題となっていることから、バルセロナ市では 2028 年 11 月までに民泊を廃止する方針を決定してお
り、他地域でも規制強化の動きが出ている。スペインの観光の魅力は何と言っても「太陽とビーチ」「ユネ
スコ世界遺産」「食事」の 3 項目。

【ポルトガル】

ポルトガルでは 2023 年に過去最高の 2,650 万人の外国人観光客が訪れた。内訳であるがスペイン、
イギリス、フランス、ドイツ、スイスの上位 5 か国で約 6 割を占める。観光業は GDP の 16.5%を占める。ダ
2 の都市ポルトではぶどう畑を眺められるドウロ川クルーズなどがある。また安価で美味しいワイン、特に
北部で造られる完熟前のぶどうを使った微発砲ワインが有名。また家庭料理では食べ方が 365 通りある
と言われるほどバカリャウ(タラ)を使うレシピが人気。

■脱炭素に向けた取組

EU は 2050 年までに温室効果ガスの排出実質ゼロを目指しており、EU 加盟国は国家長期戦略のほ
か、2021 年～2030 年までの 10 年間に取り組むべき内容をまとめた「国家エネルギー・気候計画
(NECP)」を作成している。また両国とも日照時間は年間 2,500～3,000 時間と恵まれるなど、太陽光の
強みだけでなく風力にも恵まれていることから電力需要に対する再エネ比率を高めている。

因みにスペインは総発電量に占める再エネ割合を 81%に引き上げることを公表。2023 年 5 月 16 日
の午前 10 時～午後 7 時の計 9 時間に再エネのみで電力需要を賅うことに成功した。またポルトガルは
2050 年までに温室効果ガスの排出実質ゼロの目標に対して 2045 年までの気候中立達成を独自に掲
げており、総発電量に占める再エネ割合を 85%に設定。2023 年 10 月 31 日～11 月 6 日の 6 日間 149
時間で、再エネのみで電力需要を賅う記録を達成、また 2024 年春にも電力需要の約 9 割を再エネで賅
っている。

また次世代エネルギーとして水素に注目が集まる中、EU は再エネを使って水を電気分解し水素ガス
を取り出す「グリーン水素」の製造と活用を後押ししており、スペイン・ポルトガル両国とも低コストで豊富な
太陽・風力エネルギーや、地中海と大西洋に挟まれた立地を強みに、欧州向けのグリーン水素の輸出ハ
ブになる構想を描いている。ただしポルトガルでは 24 年 4 月に中道左派に政権交代、環境相からは「輸
出よりも地産地消、産業誘致のために活用すべき」と、現実路線へ軌道修正する発言が出されている。
江里口氏は「目標達成に向けては更なる再エネ発電の設置が必要ではあるが、こういった状況も勘案、
今後の動向には注視していく必要がある」と述べ講話を締め括った。

バリャードワイナリー見学

今回の視察の最初の訪問地はポルト市から東へ約 70 km、レグアの街にある 1716 年設立の「キンタ・ド・バリャード(バリャードワイナリー)」。ドウロ渓谷で最も古いワイナリーの一つであり、敷地は 65ha と東京ドームの 14 個分の広さを誇る。

レグアはポートワインの集積地として古くから発展してきたアルト・ドウロ地域の中心的な街。ドウロ川上流には川沿いの山の斜面がブドウの段々畑に利用され、段々畑を支える石垣の総延長は数万kmにも及ぶとのこと。その美しい景観と 300 年以上前からの歴史的ワイン造り(ポートワイン)が評価され



世界遺産に登録されている。この地域は片岩質の土壌の斜面と地中海性気候が特徴で、冬は非常に寒く夏は非常に暑く乾燥しており、ブドウの完熟、そして優れた品質のワインの生産に適しているのだ。ここで産出されるワインはポートワインとして世界的にも有名。なおポートワインは 1756 年に世界で初めて原産地呼称管理法の対象となっており、フランス・ボルドーの 5 大シャトー等の格付けが 1855 年であることから、なんと 100 年も前にポートワインはブランディングされたのである。

因みにポートワインは甘くて強いお酒。ポルトガル第 2 の都市ポルトから出荷されたためこの名が付いたとのこと。通常ワインを造るときは、ブドウに酵母を加えて醗酵させることでブドウの糖分がアルコールに変化するのだが、ポートワインは度数の非常に高いブランデーを加えることでブドウをそれ以上醗酵させず、結果的にブドウの甘味が残ったアルコール度数の高いワインが生まれるのだ。ポートワインのアルコール度数は 19 度から 22 度。なぜアルコール度数の高いワインが産まれたのか？それは 17 世紀後半、イギリスがフランスからのワインの輸入を禁止したことに起因する。フランスより輸送時間のかかるポルトガルからワインを輸入するにあたり、より保存が効くようにアルコール度数を高めたのである。

当日は「キンタ・ド・バリャード(バリャードワイナリー)」の歴史についてレクチャーを受けた後、ブドウ畑やワイン製造の現場を見学した。そして最後はお楽しみ、ワインの試飲。一同これを楽しみにしていたと言っても過言ではないが、5 種類のワインを飲み比べ、ポートワインの深い味わいを感じる事が出来た。



ポルト市のスマートシティ構想



ポルト市は、ポルトガルの北西部にある2000年の歴史を有する港湾都市。海上貿易におけるヨーロッパの主要な拠点として発達した港町で首都リスボンに次ぐ第2の街。人口は23.2万人であるが、ポルト都市圏としては160万人の規模を有する。主な産業は商工業と水産業。銀細工、香水、宝石加工なども有名で、特にポートワインの名で知られるワインの名産地でもある。ポルト歴史地区として街全体がユネスコ世界遺産に登録されている。

同市は2014年に持続可能性の3つの柱(環境、経済、社会)の課題に対処することを目指し、中長期戦略を策定。当初は2030年をめどにCO2を50%削減し、2050年でのカーボンニュートラルを目指すとしていたが、その後2021年に2030年までにカーボンニュートラルを目指すとの目標に上方修正した。2023年には2030年のカーボンニュートラルに向けた道筋を設定するために市庁舎内にカーボンニュートラル総局が設立され、2024年には気候基本法に規定されている戦略的および運用計画手段である新しい市町村気候行動計画(PMAC)を準備、都市の気候レジリエ



ンスを高めるための主要な行動方針を定義する予定。なおポルト市はEU(欧州委員会)が選定したスマートシティ100都市にも選ばれている。

当日はポルト市庁舎にて副市長のフィリップ・アラウージョ氏か

らスマートシティ構想における具体的なプログラムについて以下の説明を受けた。

同市のCO2排出量は2004年時点で1,304.3千t、約50%が都市部門から、そして約40%が交通部門から排出されていた。これを2030年までにカーボンニュートラルにすべく様々な取組を行っている。

まずは緑地帯の拡大であるが、公共スペースへ67,000本の植樹を行うということで、アスプレラ都市公園や、アラメダ都市公園等において緑地の拡張を行っている。

次に都市の水循環管理であるが、上下水道の設備は100年以上の古い設備であるがメンテナンスをしっかりと行うことで、無駄になる水は約13%と低い水準に抑えることが出来ている。そして下水は道路清掃や公園への散水等に利用すると同時に水の再循環にも積極的に取り組んでいる。

またエネルギーの有効化については、学校等の照明をLED化、また太陽光パネルを各家の屋根に設

置するといった取組も進めている。因みにポルト市民の 12%が公営住宅に居住しているが、全ての公営住宅に太陽光パネルを設置するべく取り組んでいる状況。また 1kw あたり 500 ユーロの補助金を支給する政策も行っている。公用車は電気自動車シフトを 75%まで進めておりすでに累計の走行距離が約 1,000 万kmにも及んでいるとのこと。また電気自動車と並行してバイオメタンバスの導入にも取り組んでおり、下水処理施設やゴミ処理施設から生まれたガスを利用しているのである。

次に交通網の整備であるが、地下鉄の増設や 1 か月 30 ユーロで様々な公共の乗り物に乗れるパスを発行しており 23 歳以下は無料。またバス専用道路網を整備し、そこではグリーン水素バスによる運行を計画しているほか、市内には水素を製造する工場も建設する予定。

ゴミ処理に関してはリサイクルを出来るだけ増やすという方針のもと、現在のゴミ処理施設におけるリサイクル割合は 43%となっており、ゴミ処理に関して埋立は行っていない。また農産物に関しては地産地消を掲げ、出来るだけ農業生産者が街の周辺で生産できるような政策を展開している。

最後にフィリップ副市長はこれまで話した政策は全てデジタル化の進展が必須であると考えており、データ処理システムの構築やセンサーネットワークの活用が重要であると述べた。また市民がデジタル化の恩恵を受けるべくデジタルカードを作成・配布。このデータを集めることでエネルギー政策に役立てているのである。因みにこのカードを使って市民はシアター等の入場割引や公共の乗り物無料のサービスなど様々なサービスを享受することが出来るようになっている。

その後会員からは、デジタルカードのデータ取得範囲やゴミ処理のリサイクル状況、原子力発電の有無、風力発電の割合、太陽光発電パネルの設置と街の景観、観光客増への対応、蓄電の対応、緑地計画の内容、カーボンタックス等多くの質問が出され、ポルト市の各種施策に対する関心の高さが窺えた。

フィリップ副市長の「街は生き物である。どうコントロールしていくかがポルト市の課題である」との発言が印象に残った。そして同市のスマートシティ構想の実現のために行政で出来ることは限られており、如何に一般市民の参加を促すかという観点で様々な工夫を取り入れている点が窺え、大変参考になる訪問になった。



TOPICS1 ポルト市内観光

【ドン・ルイス 1 世橋】

ポルトを横断するドウロ川に架かるドン・ルイス 1 世橋は世界遺産に登録されているポルトのシンボルで 1886 年に開通。同橋は幅 8m の 2 階建て構造になっており、長さ 395m の上層はメトロ及び歩行者用、174m の下層は自動車用及び歩行者用になっている。橋から見るポルト中心部の街並みは絶景。



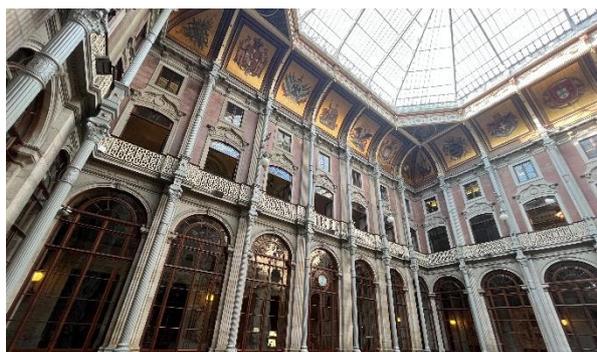
【ポルト大聖堂】



ポルト大聖堂は市内で最も古い建造物であり、ポルトガル国内で最も重要なロマネスク様式建築の一つである。1110 年頃に建立が開始されて 13 世紀に完成したと言われている。当日は修復工事中で美しい建物を見ることは出来なかったが、大聖堂は高台にありポルトの美しい街並みが見下ろすことが出来た。

【ボルサ宮殿】

火災で焼失したサン・フランシスコ修道院の跡地に 1834 年に造られ、商業組合や裁判所、証券取引所として使われていた。スペインのアルハンブラ宮殿を模して造られたという「アラブの間」は、当時のポルトの経済力を誇示するため 18 年かけて造られたもので、天井から壁全体を飾る色とりどりのきめ細かいアラベスク模様のタイルは美しく、その豪華絢爛さに参加者一同目を奪われた。



【ボリャオン市場】

ポルトの中心にあるボリャオン市場は 19 世紀半ばから続く伝統的な市場で、2022 年にリニューアル。1階が市場、2階はレストランが出店。クリーンで開放的な建物の中に、約 50 軒の店があり、野菜や果物、ワイン、チーズ、パン、花、雑貨、工芸品などが並び、多くの観光客や市民で大変賑わっていた。



【サン・ベント駅】

1916 年に開業したサン・ベント駅はポルトの中心部に位置、修道院の跡地に造られた。フランスのボザール様式の影響を受けた駅舎は、「世界で最も美しい駅」とも称されている。芸術家ジョルジュ・コラッソによる約 2 万枚のアズレージョ(青と白のタイル装飾)が駅舎の内部を装飾し、ジョアン 1 世のポルト入城など、ポルトに纏わる歴史的な出来事が描かれている。



※ポルトガルのあれこれ

ポルトガルの ETC は日本の様なゲートを設けていない。フリーフロー方式と呼ばれ、高速道路上にガントリー(門型の構造物)が設置され、ETC 車載機のデータや車のナンバーを読み取っている。従って日本の高速道路のようにゲートを減速して通過する必要がないのだ。

またポルトガルは労働法の整備が進んでいる国。例えば雇用主は勤務時間外においては「労働者のプライバシーを尊重しなければならない」と定められており、緊急時を除いて従業員に電話やメールをすることは違法、「重大な」違反には罰金が課されるのだ。働く人の権利を尊重する国だけあり、例えば観光バスの運転手が法律で定められた休憩時間を取っていないと、自動的にバスのエンジンが道の途中でストップするという、我が国では考えられない事態が発生することもあるのだとか……。



中前隆博特命全権大使と懇談



マドリードはスペインの首都。マドリード州の州都でありマドリード県の県都でもある。人口は約 325 万人、EU 内においてパリに次ぐ規模の大都市圏。

10月15日(火)早朝5時30分にポルト市のホテルを出発し一路スペイン・マドリードへ。マドリード到着後、今回の視察の目玉でもある在スペイン日本国大使公邸へ向かう。因みに在スペイン日本国大使館の前身は1900年に開設された在スペイン日本帝国公使館。1952年に在スペイン日本国大使館として開設され、埼玉県出身の渋沢信一氏(東京株式取引所頭取を務めた渋沢成一郎の五男)が初代特命全権大使に任命された。

当日は大使公邸に到着後、公邸の園庭にてウエルカムドリンクとともに中前隆博特命全権大使から歓迎の挨拶を頂戴した。その後公邸内に移動し、大使からスペイン情勢等についてレクチャーを受けた。

以下にレクチャー内容を要約する。

埼玉経済同友会の今年度の活動テーマは「人口爆縮時代、万全を期して取り組もう」と伺っているが、これは日本・スペインともに大変重要なテーマであり、少子高齢化というのはこれから共同で取り組む大きな課題になるかと思っている。スペインの出生率は1.2でありこのままだとどんどん人口が減るはずだが、実はスペインはこの20年ほどで人口が4,000万人から4,800万人に2割も増えているのである。これは中南米からの移民者のおかげ。今ヨーロッパでは移民が大変な問題となっており政治問題にもなっ



いるが、中南米から来る移民はスペイン語を話すので同化しているのだ。スペイン自体も労働力を非常に必要としている状況であり移民が比較的うまく受け入れられてきたのである。そもそもスペインも 80 年代までは出稼ぎでヨーロッパに行っていたことから移民に対する理解があり、人口減少や高齢化が経済の制約要因になるということは他のヨーロッパ諸国に比べて穏やかな状況なのである。そういうこともありスペインの経済はコロナで非常に痛手を受け▲10% ぐらいにまで落ち込んだが、その後順調に回復し今年は +2.7%、来年も +2.4% 位と予想する。また昨年あたりまではインフレを大変心配していたが先月の段階で前年同期比 1.5% と割と落ち着いている。

さて、スペインにお越しいただき、スペインのイメージは闘牛やフラメンコなど強いイメージがあるかもしれないが、今日のスペインを知っていただく機会がなかなかないのが個人的には少し残念だ。実はスペインは一般的なイメージとはだいぶ違って非常にダイナミックな産業を持っているのである。スペインから日本への輸出で一番大きな品目は依然として豚肉であるが実は自動車も輸出している。因みにスペインはヨーロッパで第二の自動車生産国。また再生エネルギーやグリーン水素など先端的・先進的な企業が数多くある。電力大手イベルトローラは秋田県沖の洋上風力発電に関わるなど、そういった分野で非常に元気なあるいは技術的・マーケティング的に尖がったものを持った企業が存在するのだ。

また軽くて丈夫な鋼板で自動車のボディを作る技術を有するスペインの会社が三重県に自前の工場を作り日産に供給している。日本もスペインもマーケットが成熟しており二国間の物品貿易だけでは経済が大きくなることを期待できない中、日本の企業がスペインの特色ある企業と一緒に組み、そして世界のマーケットに打って出ようと考えている企業が最近増えている。



先ほど申し上げたエネルギーのほか、最近では鉄道車両などインフラ、量子コンピューターも含めた IT において、スペインでブームになっている日本の企業もある。このようにちょっと意外な側面のスペインが十分に知られていないというのが最大の課題。知られていないがゆえにビジネスチャンスが取れてない状況があるのではないかとというのが私の問題意識である。そういう意味で今回のように経済ミッションとしてお越しいただき、この国の実情をご覧いただけるというのは大変ありがたいことである。

中南米とのつながりがよく言われるが、スペインの企業は実は北米アメリカとかオーストラリアに進出しているなど、グローバルに出ていこうとしている企業がある一方で、日本も含めて東アジアはスペインの企業にとってもまだこれからというようなマーケットであろうと思う。そういう中で、日本とスペインの企業関係で気

が付くことをいくつか申し上げると、お互いの二国間の貿易はさることながら、投資を通じた関係、あるいは業務提携を通じた関係が進んでいること。日本企業の現地法人や支店はあるが、面白いことに日本の企業の方々はその事業の運営を現地の人に任せており、日本を代表する大企業がスペインに現地法人がありながらも、日本人が 1 人もいないということが普通に起きているのだ。そしてこの副作用として、スペインの商工会議所の規模がどんどん小さくなっており、また日本人学校の生徒数も減っているのである。一方、最近のスペインではちょっとした日本ブームが起きている。いろいろな要因があると思うが、よく言われるのはアニメや漫画といった文化的な伝搬が影響しているということもある。日本の企業が日本人から仕事を任された現地の人も含めて、お客様を大事にする文化であるとか、信用を何より大切にするという企業文化を通じて、日本人に対する信用・信頼が出来つつあるということを非常に強く感じているところである。そういう意味で日本に対するイメージ、日本に対する認識というのが大変好転してきている。これはひとえにビジネス活動の中での尽力の賜物であると思っており、この場で改めて感謝を申し上げたいし、引き続きよろしくお願ひしたい。

さて、今回の視察の中で、新しいスペイン、ちょっと違ったスペインを文化・ビジネス双方の面で感じていただき、是非多くのものご覧いただきたいと思う。皆さんの視察が実り多いものとなるよう祈念して挨拶とさせていただきます。

中前大使のレクチャー後は国際委員会田中徳米衛委員長が乾杯の発声を行い、その後、中前大使・佐々木舞参事官・宮口慎一郎一等書記官・四方涼平一等書記官を交え、ビジネスランチ形式にて現地情勢・経済安全保障・環境問題・食糧問題等多岐に亘るテーマで情報交換を実施した。最後に戸所邦弘代表幹事からの御礼挨拶、吉野寛治代表幹事と谷澤薫国際委員会副委員長からの記念品贈呈があり、約 2 時間に亘る懇談会が終了した。



再生可能エネルギーの研究開発



環境・技術研究センター(Ciemat)は、1951年に設立されたスペインのマドリードにあるエネルギー、環境、技術に関する研究機関。スペイン科学技術イノベーション省の傘下であり、スペインにおけるエネルギー、環境、技術に関する研究開発の中核的な機関。欧州連合の研究プロジェクトや国際機関に積極的に参加している。Ciematの年間予算は約1億3,670万ユーロ(2022年)。約1,500人の研究者、技術者、行政職員が勤務している。



当日はピラー・ガルシア部長よりセンターの概要について説明を受けたのち、メルセデス・バステロスエネルギー課長から再生可能エネルギーの研究開発活動について、ジョセ・マリア・サンチェス燃料電池課長からグリーン水素の研究に関する説明を受けた。

■再生可能エネルギーの研究開発活動

Ciematのエネルギー研究は、基礎研究や産業分野における応用に関する研究を手掛けている。特に成果を挙げているのが技術開発であり、基礎研究と応用研究の間のステージで強みを発揮しており、現在、再生可能エネルギー及びその発電における廃棄物処理に関する研究を特に進めている。Ciematの研究拠点はマドリードの拠点以外にアルメニアの部署で太陽光・太陽熱発電、そしてソリアの部署ではバイオ燃料及び風力発電に関する研究を行うなど、主に3カ所の研究拠点で構成されている。

現在スペインにおける再生可能エネルギーの占める割合はピークで50%にも達している。しかし10年～15年前には全く見られなかった状況にあった。エネルギー分野は世界で加速度的に技術革新が行われており、そういった技術革新に関する調査を日々行い、世界中で実証されている新しい技術を取り入れ研究戦略・研究計画にどのように反映させていくのかという活動が主な業務となっている。特に大きな研究となっているのがアルメニアでの太陽光・太陽熱発電の研究であり、Ciematが運営している集熱型の太陽熱発電所はヨーロッパでは最も大きく、アメリカと並んで最大級の規模を誇っている。

そしてもう一つ進めている研究が、太陽光発電及び風力発電に関する研究。太陽光発電の研究では発電コストの削減・低減をテーマとしており、特に希少な材料の使用の低減によってコストを下げるという研究を行っている。また風力発電に関しては浮体型の洋上発電に関する技術研究も進めている。またバイオマスをどのように燃料に転換するか、そして実際にどのように運用するかという研究開発も行っている。

作物から燃料を抽出する、もしくは化学的に燃料を合成するという技術である。そして現在取り組んでおり注目を集めているのが電力のスマートネットワークの研究だ。これはエネルギーを断続することなく常に供給できる体制を整えることが最終目標となる。その中で風力発電・太陽光発電の両方を一度に発電する、そしてそれを蓄電するという研究を進めているのである。

■グリーン水素の研究

ヨーロッパは日本に比べ水素の研究は遅れてスタートしたが Ciemat は 30 年前から水素の研究を行っており、その研究がヨーロッパの経済に役立つことをモットーにしている。これまで水素の生産は化石燃料に頼っていたが、これをクリーンなエネルギーで生産するグリーン水素の研究を当センターで行っている。具体的には集熱型太陽熱発電の技術を使ってエネルギーを活用し水素の生産に転用するという研究を進めており、またバイオ燃料もしくは産業廃棄物を由来とする燃料で水素を生産するという技術を開発している。因みに産業廃棄物による水素の生産は吸着剤を用いて CO₂ を集めそこから水素を取り出すというもの。まだ大量に水素が回収できる段階までに



なっていないが、産業界として応用していか研究を行っている。また水素は生産だけでなく水素が消費されるポイントまで輸送が必要になるため、水素の貯蔵施設、そして水素の輸送に関する研究も並行して進めている。さらに水素の実用化に関しては、天然

ガスとの混合による家庭用・産業用のボイラーの開発を進めておりすでに実証実験も行っている。

また活用している技術として、PEM(高分子電解質膜)や酸化還元剤、低温ポリマー型燃料電池、固体酸化物系燃料電池の開発を行っており、これらは小型乗用車に搭載してその燃料として活用するという研究を進めている。因みに低温ポリマー型燃料電池は湿度の問題がボトルネックになっていたが素材を新たに開発することで小型化に成功、ドローンや車椅子にも搭載できるサイズになっている。

質疑応答では低温ポリマー型燃料電池・固体酸化物系燃料電池の実用化の可能性や水素エネルギーの将来性、風力発電・洋上発電の開発状況、バイオマスの活用状況等多くの質問が出されるとともに、活発な意見交換が行われた。

Ciemat 訪問を通じて、スペインにおけるエネルギー政策や研究開発状況等についての理解が深まるとともに、我が国におけるエネルギー政策を考えるいい機会になった。

TOPICS2 マドリード市内観光

【フラメンコ鑑賞】

フラメンコの起源は諸説あるが、18 世紀末、政府から追放されたイスラム系少数民族のジプシーが山岳での生活を強いられる中、嘆きや苦しみを歌で表現したものがフラメンコの起源といわれている。後にジプシーと現地人(アラブ系の民族)の音楽が融合してフラメンコの原型ができた。

今回の視察ではマドリードの中心部マヨール広場に近い世界最古のレストラン「ボティン」にて夕食後、希望者 16 名でタブラオ「ラ・キメラ (La Quimera)」で本場のフラメンコを鑑賞した。タブラオとはバルやレストランで板張り舞台のあるところを表す。スペイン語でタブラは板を意味する言葉で、ここから『タブラオ』という言葉が生まれた。



【パラシオ・レアルとオリエンテ広場】



パラシオ・レアル(王宮)は 10 世紀ごろにイスラム教徒によって建てられ、16 世紀にはハプスブルグ家の居城となったが 1734 年の火災で焼失。その後フェリペ 5 世により再建された。

パラシオ・レアルの東側にあるオリエンテ広場は 18 世紀に王宮が建てられた当時、庭園があったがその後の 19 世紀に都市計画の変更などによりこの場所は何度も大きく姿を変えた。現在見ることのできる広場は 1941 年に設計されたもので、フェリペ 4 世の騎馬像を中央に、歴代のスペイン王の彫像が左右に合わせて 20 並んでいる。なお馬の後ろ脚だけで立っている騎馬像は世界で初めて作られたといわれ、技術的な価値が高い。

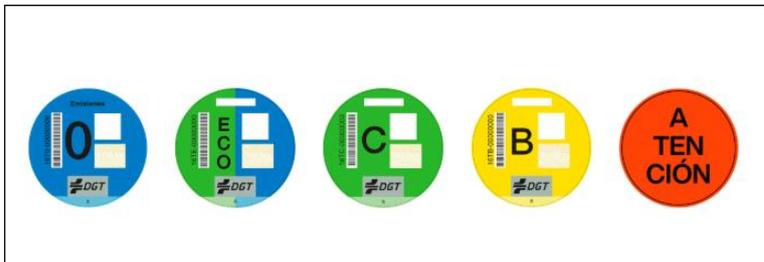
【プラド美術館】

パリのルーブル美術館、ロンドンのナショナルギャラリーと並ぶヨーロッパ 3 大美術館の一つ。主に 16 世紀から 17 世紀にかけてスペイン王室が収集したコレクションを展示している美術館。フェリペ 2 世とフェリペ 4 世がコレクションの基礎を築き、1819 年に王立美術館として開館した。ベラスケスの『ラス・メニーナス』、ゴヤの『裸のマハ』や『着衣のマハ』等を始めとするスペイン絵画の傑作が集結している他に、フランスやイタリアの名画等、諸外国の作品も収蔵されている。現在展示しているコレクションは約 1,800 点にのぼる。



※マドリードのあれこれ

マドリードでは 2021 年 9 月 13 日に持続可能なモビリティ条例が承認されたことにより、都市全体を低排出ゾーンとする交通規制が採択され 2025 年までに段階的に適用されることになっている。車には環境性能



に応じて 5 種類に分類されたステッカーがあり、ステッカーごとに交通規制が定められている。そして車の保有者は見える場所に環境ステッカーを貼付しておくことが義務づけられているのだ。例えば古いガソリン車やディーゼル車などはマドリード市内のすべての公道および都市道路の通行が禁止されるなどの厳しい規制が求められる。なお万が一違反した場合には高額な罰金が科せられるとのこと。なおこうした取組はバルセロナでも導入されている。

またオリエンテ広場の周辺ははじめマドリード市内の至る所には環境に配慮したゴミ箱が設置されている。ゴミ箱の蓋には太陽光パネルが設置されておりゴミの蓄積状況が携帯電話回線網を通じてリアルタイム



に報告されるシステムが導入されている。またゴミの自動圧縮機能によりゴミ収容量が 5 倍になるなど、この機能によりゴミの回収頻度を減らすことに成功しているのだ。

マドリード市内を歩いていると、至るところで環境への配慮に関する取組を観察することが出来、環境先進国としての意識の高さに感心させられた。

A&B イノベティブ・ソリューションズの経営モデル

スペインのバスク州は、サステナビリティと競争力に重点を置いた独自の経営モデルやそれを客観的に評価する仕組み(先進的経営モデル)を発展させてきた。そうした取り組みで高い評価を受ける企業が、バイオクリーナー製造を手掛ける A&B イノベティブ・ソリューションズ。この先進的経営モデルでは戦略・顧客・人材・社会・イノベーション・成果の 6 領域で強みと改善点を追求しており、その取組に対し当社は毎年バスク州政府から受賞されている。中でも今年是最優秀であるゴールド賞を受賞、また 2018 年には欧州環境ビジネス賞を受賞するなど多くの受賞歴を誇る。

当日はパトリシア・グテレス社長から歓迎の挨拶を受けたのち、イケル・ロドリゲスマネージャーから会社の概要と取組について説明を受け、その後研究所内を視察した。



■当社について

2001 年創業の当社は従業員数 34 人の小規模企業。微生物や酵素由来の活性物質を使ったバイオ技術製品を扱い、開発から生産・販売までを一貫して担う。同社の製品は洗剤、脱脂剤、消毒液、メンテナンス関連製品、水処理用関連製品など。素材を傷めず人体にとって安全・安心、かつ環境負荷が低い製品ラインアップを実現している。当社製品は国内だけではなく 20 か国以上に輸出も行っている。

当社は他企業に全く依存することなく原材料の調達から販売・リユースまで自社で運営しているのが強み。例えば消臭剤の開発では缶にいろいろな汚れが詰まって悪臭が発生するが、当社では実際に詰まっている物資のサンプルを採集、そこにある微生物を当社内の研究所で調べその対策に何が必要なのか、調合・配合に関する開発を行っている。またバイオ医学の応用にも関わっており人体や環境にリスクのない危険有害性がないものを目指している。

■当社の経営モデルについて

1. 戦略

各部の責任者がメンバーに情報を共有し、企業の目的や使命、ビジョンがより明白になるために話し合いを繰り返すことで価値観が共有されるように工夫している。そして SWOT 分析により企業の強みや弱みなどを把握し戦略的なプランを立て目標を達成しようとしている。なお進捗管理をしっかり行うことで達成率も上がっているとのこと。



2. 顧客

様々な分野の顧客がいるがそれぞれのニーズをしっかりと把握し商品開発を行っている。またマーケティングにも力を入れており労働組合や研究施設、大学なども連携を行っている。当社が商品を開発するだけでなく、商品を手にとった人たちが持続可能で環境を守っていく商品であるという意識を広げるためにもマーケティングは重要であるとの認識のもと取り組んでいる。

3. 人材

当社の従業員は34名でほかにも国内外で販売等に携わるスタッフ等がいるが、それぞれが同じビジョンを持って協力してもらうように心がけている。バスク地方には中小企業も多くそれぞれが仲間・家族という意識がある。また委員会が定期的に開催されているがこの委員会への参加を促し皆同じ目的で働くといった気持ちを強めるよう努力している。また能力開発やワークライフバランスなどについても積極的に取り組んでおり従業員満足度も向上している。

4. 社会

SDGs に関して17項目のうち12項目の達成に向けて取り組んでいる。アジェンダ2030にも積極的に関与しており、問題の一部になるのではなく解決策の一部になるよう行動している。またどのようなモデルでどのような実績があるのかについてナビゲーターレポートを作成し定期的に企業等にシェアしている。

5. イノベーション

当社はこの業界のリーダー的存在となっており、バイオ技術、そして独自のテクノロジーを活用し、酵素と微生物をベースにした技術を応用して開発している。そしてターゲットになるクライアントの工場など様々な現場に行き共同開発をすることで、どのようなニーズがあるのか一緒に開発するといった協力関係もイノベーションとして評価されている。人体にリスクのない原材料を使うことで、革新的なイノベーションとして製品が作られており、より安全で環境への負荷を減らしているといった実績も評価されている。

6. 成果

生まれてから死ぬまでのサイクルを全てエコにするという循環型のエコデザイン、つまり商品の開発、原材料の製造過程、流通、リサイクルユース全てのプロセスがエコであるという企画、これはISO14006であるがこの認証を当社は取得しており、揮発性の有機化合物、また有害廃棄物の管理が必要ない商品の



シリーズを開発することが出来た。有害廃棄物が無いということで様々な手続きも省略でき、また有害廃棄物を保管するといった倉庫の必要もないことから、全てのサイクルがエコなのである。

なお 2030 年に向けて EU が定める目標には温暖化ガスの 55%削減を定めているが、当社のエコ溶剤ではすでに 57%削減することが出来ている。また SDGs17 項目のうち健康福祉や気候変動対策等 6 項目を達成している。

イケル・ロドリゲス氏から当社の概要と経営モデルについての説明を受け、その後の質疑応答では、商品の成分、組織の立ち上げ経緯、資本構成、食品産業における商品開発等、多くの質問が出された。

質疑応答の後、成分分析や調合を行う研究所を見学し視察を終了した。

技術力に裏付けされた商品開発、環境負荷軽減への取組、徹底したリスク管理等を直接肌で感じる事が出来、大変有意義な視察となった。



「美食」をはじめとする地域ブランディング



サンセバスチャンは 1813 年に戦争で街が崩壊した後、1843 年ごろからマドリードの王族が夏の間の避暑地として利用されてきた地域でありそれがこの地域の観光地としての始まり。地域を活性化するためには、地域そのものの魅力を高める地域ブランディングが重要であり、サンセバスチャンは特に「美食」という地域資産を通じた地域ブランディングで多くの観光客を集めている。当日は 19 世紀に建てられた元カジノの建物を改築したサンセバスティアン市庁舎にて、カルメン・バース観光局マーケティング部長からサンセバスチャンの街づくりに関する説明を受けた。

■サンセバスチャンについて

サンセバスチャンは美食の文化が非常に発展した都市であり、また観光大国ということで力が入っている街である。一方、人口が約 19 万人、そして観光業の GDP に占める割合が 13.9%。コンパクトでかつサービスが充実していることから非常に好評を得ており治安も良い安全な街である。こうしたことから市民の満足度もスペインの中で上位を誇っているのである。

サンセバスチャンは半径 100 km 以内に 4 つの空港があり、昨年は 100 万人の観光客が訪れた。そしてそのうち 62%が外国人観光客である。隣国フランスよりもアメリカからの観光客が多く、最近ではカナダやメキシコからの観光客も新たなターゲットになっている。スペインは太陽が燦燦と輝く暑い国でビーチがあるというイメージがあるが、バスク地方は気候条件や文化が異なっていることから、スペインの観光地とは違ったニーズを満たせる特別な街として発展してきた。

サンセバスチャンは 150 年前から観光地として進化しているという歴史がある。これは当時イザベル 2 世が皮膚病を患い医師から日光浴・海水浴を勧められコンチャビーチを訪問するようになり、その後王室や上流階級の人達がスペインやフランスの人々の避暑地となったのである。20 世紀の初めには観光地として知られるようになり 1912 年にはホテルや劇場もオープン。2011 年までは国内の観光客へのアピールが非常に強かったがそれ以降は海外に向けて発信を広げていった。何故かと言うと 2011 年に武装集団が解散するといった政治的な紛争が解決されたから。これにより国内や海外から注目を浴びるようになったのである。そして観光を産業として様々な分野に分けて戦略的に強めていこうと変わったのだ。

■食文化

この街独特の強みそしてこの街にしかないもの、そして文化を売りにして、観光リゾート地という形ではなく違った形でアピールを始めたのであるが代表的なものはガストロノミー(美食学)。バスクは全体的



に食文化が豊かと言われているがサンセバスチャンには他の県とは違う独自の強みがあった。ミシュランの星付きのレストランの数が多くやつまんで食べるピンチョスの文化、シードルやチャコリといった昔から作られているお酒。そしてバスク・クリナリー・センターという調理科学大学もある。研究施設、イノベーションセンターも出来ており産業として非常に力を入れてきているのだ。またスペイン全国で三ツ星レストランが 13 しかないがそのうちサンセバスチャンには 3 軒もあり、かつ 1 m²あたりのミシュランの星付きレストランの数が世界で京都に次ぐ第 2 位を誇っている。おかげでサンセバスチャンは食を中心とした観光業が非常に成長し、サンセバスチャンは食の首都と言われるようになったことから海外から修行に来る人も多い。街では 200 軒あるバルをはしごしたり料理の見栄えを楽しんだりする文化が成功したがその鍵は現地の人達と交流しながら楽しむことが出来るということ。そしてその文化を楽しむということが非常に大事な要素になっているのである。また 1 万ℓの大きな樽に入ってるヴィンテージのシードルを直接蛇口からグラスに注いで飲むという風習がある。世界中でシードルは作られているがこうして楽しむ文化はあまり他の国ではないのではないか。同時に食べる料理も地産地消でバスクにおける魚の消費量は日本に次ぐと言われている。

■食以外の文化

またサンセバスチャンはヨーロッパのハリウッドと言われるようになった国際映画祭が毎年 9 月に開催され、他にも国際ジャズフェスティバルが開催されるなど食文化以外にもこうした行事が世界で知られてきている。こうした取組が認められ 2016 年に欧州文化都市に認定された。また民族文化として何千年も前から話され由来がわからないとも言われる古いバスク語を守っており、この地域としての誇りになっている。

この街はイベントの 60%が国際的な行事で宿泊した参加者が 46,000 人、だいたい 3 泊するので 13 万 4,300 人もの宿泊数が実績となっており、様々なテーマに基づいた経済的商業的なイベント、教育的なイベントも開催されている。そしてサービスが充実している街としてワンランク上の高級観光地を売りにしている。なぜ市民の満足度が高いのかだが、その答えはスポーツと自然が楽しめるということ。

因みに 19 万人の街がなぜ成功したのかよく聞かれる質問だが、経済的に力があつたわけではなく、実際に訪れた人たちの口コミ、体験談がインターネットで広がったことが大き

い。一方、市民と観光客の間に様々な問題や葛藤があるのも事実。観光客が増えたせいで市民が日常行けていたところに行けなくなったとか物価が上昇したといった点。こうした課題も踏まえ、これからはプロモーションに力を入れるのではなく、これまでの制度の見直しや管理の仕方など様々な新たな試みが行われるようになっており、今後は市民と観光客の共生が出来るのではないかと期待しているところである。



カルメン・バース氏からサンセバスチャンの説明が行われた後、質疑応答が行われ街の問題点や美食家クラブの運営等についての質問が出された。

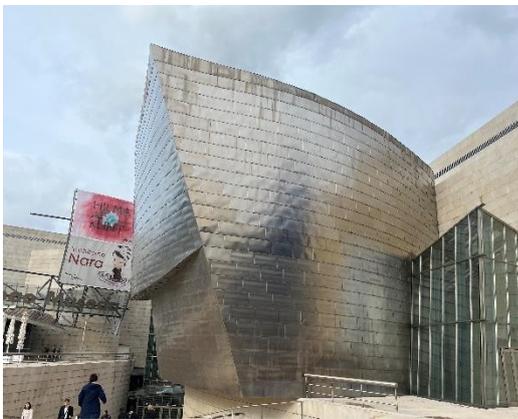
最後に市庁舎で記念撮影を行い視察が終了した。街のブランドをどう高めていったのか、人口 19 万人の小さな街が世界的に名の知れた観光地としてどのように発展したのか、今回の説明を聞いて、魅力度ランキングで下位に沈む埼玉県で参考にできることがあるのではと考えさせられた視察となった。

TOPICS3 ビルバオ・サンセバスチャン市内観光

【グッゲンハイム美術館】

ニューヨークに本部を置くグッゲンハイム美術館の分館として 1997 年に開館。かつて造船所のあった川岸に聳える前衛的な建物は、アメリカの建築家フランク・O・ゲーリーによるもの。ビルバオは過去には工業都市として栄えていたが徐々に廃れ経済復興の観点から同美術館が作られたとのこと。この復興は現地の人々に「グッゲンハイム効果」と呼ばれている。

3 つのフロアを持つ館内では、常設展のほか、ほぼ半年ごとに企画展が開催され、ワークショップも行われるなどモダンアートの発信地となっている。当日は奈良美智氏の特別展が開催されていた。美術館の入り口近くには「パピー」と呼ばれる高さ 12.4 メートル・重さ約 15 トンの花でつくられた子犬のオブジェが鎮座。なかなかの迫力であり、多くの観光客が記念撮影を行っていた。



【リアル・ソシエダ・サッカースタジアム】

サンセバスチャンの中心部から南に 2 km のところに日本代表を務める久保建英選手が所属するサッカーチーム、リアル・ソシエダのホームスタジアムがある。同チームはリアル・マドリッドや FC バルセロナも所属するスペイン 1 部リーグに所属し、1909 年に創設された歴史ある名門チーム。

当日は同スタジアムツアーに参加、普段入ることの出来ないロッカー室や選手専用レストラン、貴賓室、記者会見場などを見学することが出来た。グラウンドではプロサッカー選手気分ですぐ肩を組みながら集合写真を撮るパチリ。



参加者名簿

(敬称略)

No	氏名	所属先・役職
1	田中 徳兵衛	セントラルインターナショナル(株)
	【団長】	代表取締役社長
2	谷澤 薫	(株)谷澤総合コンサルタント
	【副団長】	代表取締役
3	谷澤 憲子	令夫人
4	岩崎 研太郎	岩崎興産(株)
		代表取締役社長
5	岩堀 和久	岩堀建設工業(株)
		代表取締役社長
6	岩堀 悠樹	岩堀建設工業(株)
		社長室係長
7	菊池 眞紀	ポーライト(株)
		代表取締役会長
8	菊池 佳子	令夫人
9	栗原 忍	デイリーホテル(株)
		代表取締役社長
10	栗原 鹿の子	デイリーホテル(株)
		専務取締役

No	氏名	所属先・役職
11	河野 経夫	(株)第一コーポレーション
		代表取締役会長
12	戸所 邦弘	富士倉庫運輸(株)
		取締役会長
13	萩野 頼子	(株)飯能製作所
		代表取締役社長
14	古屋 久昭	日本自動機工(株)
		代表取締役社長
15	古屋 敦子	日本自動機工(株)
		取締役
16	吉野 寛治	吉野電化工業(株)
		代表取締役会長
17	吉野 房子	吉野電化工業(株)
		取締役
18	早崎 寛	ティ・シー・アイ・ジャパン(株)
		代表取締役
19	畠山 信一	ティ・シー・アイ・ジャパン(株)
		添乗員
20	大石 克紀	埼玉経済同友会
		専務理事・事務局長



ポルト市庁舎にて記念撮影

発 行 者：埼玉経済同友会 国際委員会

発行責任者：大石 克紀

発 行 日：2025年1月10日（金）

さいたま市大宮区桜木町 1-7-5 ソニックシティビル 10F

電 話：048-647-4000

F A X：048-647-3845

メ ー ル：saitamadoyukai@snow.ocn.ne.jp

（本報告書の文責はすべて事務局にあります）

